

汲古一心

『仏蹟めぐり膝栗毛』(二)

中村素堂

妄言多罪、一瞬、新聞で見た身を焼いてまで老僧の抗議の衷情を披露したという記事と写真の惨状のことが身を固くさせるように思い出される。

大きな蛇のうねりを思わせる大河、何という河かを越えたとラオス、これも一時、龐大な平野の展開、それもローラーをかけたように平らで、整然という言葉そのもののような美しい耕地整理のできている水田地帯、ところどころに一群づつ立っている椰子の木、そこにある家、寺、屋根上の尖った塔の夕陽にきらめくパコダの見える部落。紅い炎の映えているような夕映えの中の青い田の中を這うようにしてバンコック市郊外の空港に着陸した。時に六時半。

あまり大きくない空港であるが降りる人も少しあり、夕陽の中で働いている場内用員の中にタイ国人らしいのが見える。トラクターのような小さい連結のバスやトラックがまた何か夕食の材料を機内へ運んでいる——どうも食い気のことになりませぬ——。わずか三十分の間だから機内に留まっているようにいわれたが、その蒸し暑さ、さすがにタイ国ともなれば年の暮れにしてこの暑さ、でも機内で裸にならなくて着替えている人はない。東京を発つ時に着てきた毛のシャツのにくらしさ。外国だ——気どつていようと椅子のポケットにあるインド舞踊の絵のある団扇などを上品に使ってみたりしても、なんとなく蒸しているのには閉口。

うっかりしていたが、ここでまた時差。一時間時計を戻すんだと注意される。ハイハイ直しました。

隣りにいたエールフランス機がおもむろに向きをかえて発つていった。その向こうのスイスエアもいなくなつた、と見とれてるうちに、自分の機も薄暗くなりかけた空港を滑り出て、灌漑用水に椰子の並木の影が静かに映る田園都市をいつしか抜けあがって、夕焼けの美しい——満天赤一色の空の中をまた西へ翔ける。

ところが南国の夕陽の沈むことの遅いのに驚いた。ゆけどもゆけども——といったって約一時間——経つても依然として大空満目の赤

い夕焼け。こんなに美しい、こんなに長い夕焼けは生まれて以来初めてだと機中の日本人は口々に感嘆久しうしてしまつた。

これがまあ、みな日本語でしゃべっていたのでよかつたが、よく考えてみると、飛行機は九千メートルの高さにあがつて、音速より速いというスピードで西へ西へと走っているんだ。もしみるみるうちに夕陽が沈んで暗くなつたら、むしろ重大問題である。マアマア日本語で、弥次さん喜太さんが話していたので、国際的な話柄にはならないですんだというもの。

エ……ああそうですか、あちらの弥次喜太君だつて、そう思ったのもいるんですか、こいつは驚いた。

しかしやっぱり夕陽はついに暮れました。機内でおいしく夕食をいただいて満腹になると一日中珍しがつて緊張した疲れも出て、上下の喉が重くなり出した時分、機内のアナウンスがシートベルトを着けるという。われわれ一行の世話人も忘れ物ないようにしてくれなどと喚き出すので、これはいよいよ志すところの天竺地に着くのだと急にまた緊張して、チャンと欲の皮も緊張させ椅子のポケットのサービスに備えてある案内記から絵団扇まで頂戴して、一時間半かの時差をまたやつて、カルカッタ時間で七時三十分、カンテラの焔が空港の芝生に並んでなびく空港に着陸した。

トラップを降りて、今日一日に東京からインドのカルカッタまで、つつがなくわれわれを運んでくれたエアインディア機の巨体を暗い空港の中で振り返り見、科学の恩恵の有りに難さに感謝する気持ちでいっぱいであつた。

降りて機の翼のそばからバスで空港事務所へ運ばれてゆく。二階建て空港の送迎台の欄干を見ると大きな白い幕が引かれ、それに英語でわれわれ日本の仏蹟研修団を歓迎するという言葉が書かれている。この言葉に間近くなつて気がつく、その下に白いサリイの人、洋服の人らで群れて、われわれ一行を出迎えているのだと判ると、急にかけたいた絡子を直したり数珠を手につけたりして、よそ行きの顔かたちになつたものの、さていよいよ日本語で通らない国へ来たんだと思うと、知っていたはずの単語までみんな発散したように思い浮かばなくなつてしまつた。(つづく)